

がん社会を診る

中川 恵一

「超高齢者」と呼ぶよう提案
しています。

日本の2015年の就労者
数は6376万人と3年連続
の増加ですが、15歳から64歳
までの生産年齢人口は前年よ
り24万人も減っています。逆

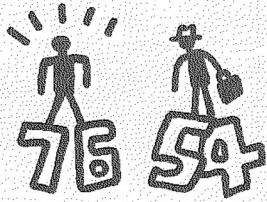
に、65歳以上の就労者数は7
30万人と前年より49万人も
増え、就労者全体に占める割
合は1割を超えて伸び続けて
います。この比率はフランス
では約1%、ドイツでも2%

程度で、欧米では移民などに
よって保っている働き手の数
を、日本では高齢者が補って
いることが分かります。そし
て、この流れを加速しそうな
動きがありました。

日本老年学会は5日に会見
を開き、現在は65歳以上とさ
れている「高齢者」の定義を
75歳以上に引き上げるべきだ
とする提言を行いました。さ
らに、前期高齢者の65～74歳
は「准高齢者」として、社会
の支え手と捉え直し、75～89
歳を「高齢者」、90歳以上を

高度成長期以降、バランス
のよい食事や十分な身体活
動、国民皆保険制度による医
療への良好なアクセスなどに
よって、日本人は心身ともに
若くなつたのだと思います。
たとえば、ザザエさんのお父
さんの波平さんは60年以上も
前からずっと54歳の会社員で
すが、大腸がんの経験者で都
知事選挙にも出馬した鳥越俊
太郎氏は76歳一人の「若さ」
の差は歴然としています。

老年学会は今回の提言を年
金の支給年齢の引き上げなど
に直接結びつけはしませ
ん。塙崎厚労大臣も「慎重に議
論しないといけない」として
いますが、社会保障や雇用制
度をめぐる議論に影響を与える
可能性は否定できません。
がんは「遺伝子の経年劣化」
といってよい病気ですから、
どんなに肉体的に若々しくて
なる確率は男女とも15%程度
もあります。65歳までにがんに
なります。がんが働く人に多発
する「がん社会」がまさに到
来しつつあります。



イラスト・中村 久美

若々しくても罹患リスク